

盛岡バッハ・カンタータ・フェライン

仙台宗教音楽合唱団

ヨハネ受難曲  
第二稿

BWV245 1725 Ver.

Johann Sebastian Bach Johannespassion

J.S.バッハ作曲 「ヨハネ受難曲(第二稿)」BWV245(1725Ver.)

2025年 4月29日 火 / 祝 15時

盛岡市民文化ホール (大ホール)



# Program



ロ

Johannespassion BWV245 Ver. II (1725)

ヨハネ受難曲 第二稿

Johann Sebastian Bach

ヨハン・セバスチャン・バッハ 作曲

プ

第 1 部 (Parte prima)

第 1 曲～第 14 曲

[演奏時間 約 40 分]

— 休憩 (20 分) —

第 2 部 (Parte seconda)

第 15 曲～第 40 曲

[演奏時間 約 80 分]

指 揮 佐々木 正 利

副 指 揮 渡 辺 修 身

合 唱  
盛岡バッハ・カンタータ・フェライン  
仙台宗教音楽合唱団

独 唱  
福音史家 伊 藤 陽 平  
イエス 田 中 雅 史  
ピラト 鈴 木 集  
バスアリアとペテロ  
荒 井 涉 吾  
ソプラノアリアと端女  
川 嶋 容 子  
アルトアリア 在 原 泉  
テノールアリアと下僕  
西 野 真 史  
バスアリア 及 川 泰 生

管 弦 楽 仙台宗教音楽アンサンブル  
コンサートミストレス 神 谷 未 穂

オーボエ 小 畑 善 昭、岡 北 斗  
フルート 阿 部 博 光、櫻 井 希  
ファゴット 西 口 真 央  
ヴァイオリン1 神 谷 未 穂、ネストル・ロドリゲス、  
平 松 典 子、須 藤 遥、  
松 山 古 流  
ヴァイオリン2 川 又 明日香、木 越 直 彦、  
浅 野 裕 里 香、小 野 英 駿  
ヴィオラ 成 田 寛、梅 田 昌 子、  
柴 生 田 桂 子  
ヴァイラダガンバ 田 崎 瑞 博  
チェロ 三 宅 進 (通奏低音)  
八 島 珠 子  
コントラバス 田 中 洸 太 郎  
オルガン 渡 辺 真 理  
チェンバロ 平 野 智 美

# ごあいさつ

盛岡バッハ・カンタータ・フェライン  
 代表 茂木 容子

ご来場の皆さま、本日はヨハネ受難曲第二稿演奏会にご来場いただき、心より御礼申し上げます。

私たちは、佐々木正利先生のもとこれまで48年間、バッハを幹として様々な音楽を演奏してまいりました。一言で言うと、「バッハを愛する仲間たち」です。これまでだいたい1年に1度くらいの演奏会を開催してきて、そのひとつひとつの思い出は尽きませんが、ひとつ挙げるとすれば、昨年6月のドイツはライプツィヒ市で行われた「バッハ音楽祭」で歌ったことです。ライプツィヒは、バッハがその人生最後の教会音楽監督（カントール）として仕事をして、たくさんのカンタータを作曲した街です。その街が、音楽祭に集ったバッハの愛好家、演奏家、合唱団の熱気に満ちていました。その雰囲気を感じつつ、大きな教会のバルコニーでのリハーサル、初対面の指揮者、オーケストラとの緊張の中での音出し、ここから、私たちの夢の時間が始まったのでした。バッハを共通言語とする人々との時間は貴重なもので、今までの活動、これからの活動に確信を与えてくれるものでした。

さて、コロナ禍は合唱活動にも影を落としました。バッハ音楽祭への招待は2020年6月が1回目、これは海外へはおろか、県外への移動も不自由で断念。2022年にもご招待いただきましたが、海外渡航への不自由、練習準備不足でお断りした経緯がありました。まさか3回目があるとは思わず、ご招待いただいた時には本当に嬉しかったのですが、単独での企画は不安の残るものでした。佐々木先生からのご提案で、本日も一緒に仙台宗教音楽合唱団の他、同じく佐々木先生のご指導を受ける山響アマデウスコア、東京21合唱団他にお声がけし、58名の合唱団で参加することができたのでした。

本日演奏するヨハネ受難曲は、私たちの演奏歴の中で4回という一番回数を重ねたプログラムです。

1回目は、1985年バッハ生誕300年記念と銘打ち、佐々木先生が指揮と福音史家を兼任でのアグレッシブな演奏会となりました。仙台宗教音楽合唱団との共催であり、盛岡、仙台での2公演でした。2回目は、2007年、故ヘルムート・ヴィンシャーマン先生の指揮による演奏会になります。マエストロのタクトから目が離せず、非常に集中して歌っていたことを覚えています。私たちのことを「ファミリー」と言ってくださったマエストロは、打ち上げの席で「この～ヨハネ受難曲～最終曲のコラールを私のお葬式で歌って欲しい」と発言し、皆の感激の涙を誘ったのでした。3回目は、私たちの合唱団創立40周年にあたる2017年、佐々木先生の指揮による第四稿の演奏会でした。幾多の優秀な声楽家を育てた佐々木先生が、選りすぐりのお弟子さんたちをソリストに起用して下さいました。そのメンバー全てが盛岡にルーツを持つ方々でありました。

そしてこのたびの4回目、盟友である仙台宗教音楽合唱団とともに第二稿を歌います。

仙台宗教音楽合唱団は、数々の演奏会で共に活動してまいりました兄弟のような存在で、佐々木先生のもと、切磋琢磨し、補い合い、高みを目指そうと同じ志を持った仲間です。

仙台宗教音楽合唱団の第40回という記念すべき演奏会になることをお祝いし、これからも、ともに前に進んでいきたいと心より願っております。バッハと共に過ごせる毎日に感謝しつつ。

# ご 挨拶

仙台宗教音楽合唱団  
委員長 北岡 倫典

本日はご来場いただき誠に有り難うございます。今回、盛岡バッハ・カンタータ・フェライン（以下、フェラインと略）様とともに、この盛岡の地で「ヨハネ受難曲（第二稿 1725 Ver.）」を演奏できますことを大変嬉しく思っております。

この場をお借りして少し当団の紹介をさせていただきます。私たちは58年前（1967年）に教会で祈りの音楽を捧げるため仙台市内で結成された合唱団を母体としております。ドイツ・バロック期の音楽を中心に据えて活動して参りましたが、1982年より本日指揮をされる佐々木正利先生のご指導を戴くこととなり、以来43年間、時代や国を問わずいわゆる宗教音楽と呼ばれる合唱の名曲を数々歌い続けております。（詳しくはホームページに載っております。“仙台宗教音楽合唱団”でご検索下さい。）

さて本日の演奏プログラムですが、実はもともと私たちの第40回演奏会（4/26開催）の演目にかどうか、と佐々木先生よりご提案を戴いたものでした。節目となる記念の演奏会にバッハの代表作の一つであり、私たちの演奏では3回目となる「ヨハネ受難曲」を歌えることに、団員皆が喜びました。しかし、実際検討を行いますと、音楽的な準備期間やマネジメント等において色々大変なことが判り、課題が生じました。コロナ禍を経て、団員数が回復できていないことも懸念の1つでした。

その時に図らずも、佐々木先生とフェライン様から、同じプログラムで仙台と盛岡で一緒に演奏を行ったらどうかのお話がありました。幸運にもホール会場はお互いに近い日程で押さえることができ、単独開催での不安を払拭する形でこのように演奏会を開催できる運びとなりました。色々な意味で良い影響と効果があったと大変有り難く感じております。

音楽的にも、長い間佐々木先生の下で音楽活動を続けていらっしゃるフェライン様とお互いに行き来をし、その技術と曲への理解や情熱に触れ、大いに刺激を受けました。団員のお一人お一人がしっかり歌っていることにいつも感心しています。

今回の管弦楽 仙台宗教音楽アンサンブル は、私たちの地元の仙台フィルハーモニー管弦楽団とその出身の方々を主体とし、各地でご活躍のソリストの皆さま、佐々木先生と長くご親交があり気心の知れた手練の方々が加わり特別に編成された、大変楽しみな本日限りのゾリステンです。名手の奏でる美しい響き、アンサンブルの妙をお楽しみください。独唱の皆さまについては、受難曲という、キャラクターとしての表現を求められる技術的にも難しい作品に対し、将来を嘱望され、実力のある若手の方々にお集まり戴きました。果敢なアプローチで音楽を奏でてくれるものと、私たちの胸も高鳴ります。

それではどうぞ、最後までごゆっくりとお聴き下さい。



## 《ヨハネ受難曲》「第二稿」鑑賞の手引き



盛岡バッハ・カンタータ・フェライン  
コンサートマスター 佐々木幹雄

本日はJ.S. バッハ（1685-1750）がドイツのライプツィヒ市において1725年3月30日に実際に演奏した記録の残る《ヨハネ受難曲》の「第二稿」をお聴きいただきます。2時間ほどかかる大曲で歌詞はドイツ語ですが、舞台に日本語の字幕が出ますので、イエスの「受難」の物語やそこに登場する人物たちの心情を想像しながら、バッハの音楽の世界をご体験ください。以下は、本作品の鑑賞の手引きです。必要に応じてお読みいただき参考にいただければ幸いです。

### ○「受難」とは … 神による救いであり預言の成就です

「受難」とは、神の子であるイエスが捕らえられ、十字架につけられ、殺されたことを言います。世界の創造主である神が人間を救うために御子イエスをこの世に遣わし、この罪なきイエスが人間の罪を全て背負って人間の身代わりとなって死ぬ、このことは人間を罪から救う神の恵みであり恩寵であるとキリスト教では考えられています。また同時に、ユダヤ教の聖典であった旧約聖書の預言が成就することでもあります。

### ○「受難『曲』」とは … 信仰心を高めるためのメディアです

キリスト教において、神の計画の通りにイエスが磔になり死ぬことはとても重要なことです。ですから、聖書に書かれ伝えられてきたその出来事を教会に集う信徒に伝えて信仰心を高めようとしたり、聖書にある受難の記事を朗読したり説教により解説したりしてきました。そのために様々なメディアを利用しました。教会に飾られる宗教画やステンドグラス、タペストリーなども同じ目的をもったメディアと言えます。そして音楽というメディアを使って人々に伝えようとしたのが、受難曲です（ちなみに「受難劇」というメディアもあります）。

中世には受難に関する聖書の文言が助祭によって朗読されていました。13世紀になると会話文などを分担して朗読されるようになり、このころから地の文を担当する福音史家（エヴァンゲリスト）の役割が登場します。その後数世紀を経て、ルター派教会ではJ. ヴァルター（1496-1570）やH. シュッツ（1585-1672）により音楽としての受難曲が発達し、18世紀のバッハに見られるような「オラトリオ風受難曲」の形式へとたどり着きました。

受難曲は1年に1回、教会暦の聖金曜日（例えば1725年は3月30日、2025年は4月18日）の礼拝でイエスの受難についての説教が行われ、その説教の前後（「第1部」は説教の前、「第2部」は説教後）に演奏されました。バッハが演奏したライプツィヒの町では聖トーマス教会と聖ニコライ教会で年ごとに交互に演奏されており、今回の「第二稿」が演奏されたのは聖トーマス教会でした。

### ○物語のあらすじ

今から二千年ほど前、イスラエルのエルサレムという町の近辺での出来事で、主に『ヨハネによる福音書』の第18章から19章までに記されている事柄です。



まず**第1部**です。初めはキドロン谷の向こうの園に、弟子のユダを含むローマの兵士たちなどの一団が訪れ、イエスを逮捕します(新バツハ全集による番号付けによると第2～5曲。以下同じ)。イエスが連れて行かれた先は大祭司ハンナの邸宅。そこでイエスはハンナに尋問(責)受けます(第6～11+曲)。その間、師であるイエスを外で待っていた弟子のペテロは師の予言通りイエスを「知らない」と3度否認してしまい、自らの信仰の弱さを悔やみます(第10～14曲)。

続いて**第2部**です。場所はローマから派遣された総督ピラトの官邸です。官邸内では連行されたイエスがピラトの尋問を受けます。ピラトを取り巻くローマの兵士たちも登場しイエスを辱めます。官邸の前ではピラトとユダヤ人たちとの問答が行われ、それによってイ(鑑)の刑が十字架による磔刑へと決まっています(第15～23曲)。最後はゴルゴタの丘が舞台です。十字架に磔にされたイエスとそれを取り巻く兵士たち、それから母マリアらとの会話、そして死を迎え、埋葬されます(第23～38曲)。

## ○音楽の特徴

説教で語られる受難の意味を、音楽を通して信徒の心に届けようとしたのでしょう、バツハは様々な工夫をしています。あたかも目の前で受難の物語が進行しているかのように、言葉や雰囲気合致した音楽づけをしたり、歌い手に役割を分担して演劇性を高めたり、物語に寄り添う信者の心情を代弁するようにアリアやコラール(後述)などの楽曲を挿入したり…。また『ヨハネによる福音書』が説く受難の意味、すなわち神と人間との仲立ちとしてのイエスの存在やその象徴としての十字架の価値を鋭く読み取って、全体の楽曲構成や歌詞、音楽に反映させたりもしています。

歌われる楽曲はたくさんあるのですが(新バツハ全集の番号付けによれば全部で40曲)、それらの歌詞(テキスト)には3つの種類があります。

まず、**聖句**と呼ばれるもので、聖書の言葉そのもので受難の物語の記事です。物語の進行役としていわゆる「地の文」を語るのが福音史家(エヴァンゲリスト)です。テノールの朗唱(レタティーヴォ)が基本です。また、登場人物であるイエスやピラトなどの言葉(会話文)はそれぞれの独唱者が担当します。下役のユダヤ人たちや兵士、祭司長など群衆の言葉は合唱が担当します。叫ぶユダヤ人たちの合唱などは群衆らしくポリフォニック【註1】に作曲されています。

次に、**自由詩**と呼ばれるもので、物語の進行を受けて、その物語を見ている(聴いている)人の心情を象徴、あるいは代弁するものです。物語の途中に挿入され、多くはアリアやアリオート【註2】として、独唱者により感情に訴えるように音楽性豊かに歌われます。終曲前の第39曲は合唱で歌われます。

最後に、**コラール**と呼ばれるもので、ドイツのルター派教会の会衆讃美歌です。これも物語の進行を受けてところどころに挿入されます。教会に集った信徒たちの、それぞれの場面での気持ちを代弁するものです。また、物語は過去の出来事としてとらえられますが、コラールによって聞き手には受難の物語に「私たちはどうなのか」と現代的な価値づけが求められます。さらに、



同じ旋律の讃美歌ながら和音づけが異なっているものもいくつかあります。音楽的な統一感をもたせながら歌詞に応じた音楽づけをするというバッハの真骨頂とも言えます。

楽曲構成の上での工夫の代表的なものは第2部冒頭のコーラルに続く場面にあります。ピラトによる尋問が始まった場面からゴルゴタの丘で十字架につけられる場面までの間が、「神の子よ、あなたが捕らわれたことで」のコーラル（第22曲）を中心にして、その前後にレチタティーヴォやコーラル、アリア、合唱などの曲種が**対称的（シンメトリー）**【註3】に配置されていることです。この構成によってその中心のコーラルの位置づけを高め、『ヨハネによる福音書』が最も重きを置く「神と人間との仲立ちとしてのイエスの存在」、「イエスこそが救い主（キリスト）である」という点をひときわ強調し、バッハはそのことを核心としたと考えられています。

その他にも、アリアの形式において当時一般的であったダ・カーポ形式を崩したり、アリアごとに多彩なオブリガート楽器【註4】を選択したり、音楽の随所に情念を表現する「フィギュール」【註5】と呼ばれる音型などの修辭的技法が用いられていたり、《ヨハネ受難曲》はバッハの音楽の特長が満載です。

## ○「第二稿」の特徴と価値

ドイツのライプツィヒ市の教会の音楽を司るトーマス・カントルという役職に1723年5月から就いたバッハは市にある4つの教会のためにたくさんの音楽をつくりました。その職務の中には毎週の礼拝のためのカンタータの作曲に加え、特別の機会にはそれに応じた楽曲をつくることも含まれていて、教会暦における聖金曜日には隔年で聖トーマス教会と聖ニコライ教会で受難曲を演奏することになっていました。バッハはライプツィヒで初めて迎える1724年4月7日の聖金曜日の礼拝用として、《ヨハネ受難曲》を作曲しました（「第一稿」、聖ニコライ教会で演奏。オリジナルな楽譜は不完全にしか残っていません）。

翌年の聖金曜日の1725年3月30日には、聖トーマス教会で《ヨハネ受難曲》を演奏しましたが、この日に向けてバッハは前年に作った「第一稿」のいくつかの部分新しい曲に入れ替えてまとめました。これを「第二稿」と呼んでいます。

特徴は、「第一稿」に比してコーラルが重視されている点にあります。大きなドラマの冒頭はコーラル旋律をもとにした壮大な合唱曲（後に、マタイ受難曲に転用）で始まり、ドラマの最後を締め括るのも「神の子羊（ラテン語では"Agnus Dei"）」のコーラルを使った合唱曲です。ライプツィヒに赴任した2年目にあたる1724年6月から1725年3月までのシーズンに、バッハは40回ほどの礼拝のためのカンタータを「コーラル・カンタータ」のスタイルで統一して作曲しました。

「コーラル・カンタータ」とは、コーラルの歌詞や旋律を、1つのカンタータに含まれる数曲に同じコーラルの旋律や歌詞を使用することで統一感が保たれるようなカンタータのことです。このスタイルで毎週のカンタータを作曲し演奏しているシーズンにあって、聖金曜日という特別な機会に上演される受難曲も同様のスタイルにしようと改訂した点に、バッハのコーラルに寄せる思いが感じられます。



ちなみにバッハは、生涯に《ヨハネ受難曲》を少なくとも4回演奏したと考えられています。初めは1724年、翌年（1725年）には大幅に改訂して「第二稿」、1732年「第三稿」、1749年「第四稿」です。それとは別にバッハ自身が決定稿をまとめるべく1739年から作業を<sup>賞</sup>始めましたが、途中で終わっている「総譜稿」と呼ばれる稿が残されています。この「総譜稿」は1985年（「バッハ生誕300年記念演奏会」指揮：佐々木正利、盛岡・仙台にて）と2002年（指揮：佐々木正利、仙台にて）および2007年（指揮：H. ヴィンシャーマン、盛岡にて）に、「第四稿」は2017年（指揮：佐々木正利、盛岡にて）に私たちは演奏しています。

今日的な演奏の歴史の面から見てみると、「総譜稿」がこれまで主に演奏されてきました。この稿はバッハが生前に「最終稿」としてまとめあげようとしたけれども途中で終<sup>鑑</sup>てしまった稿をもとに1970年代に新バッハ協会により編纂されたものでした。それが作曲者の音楽的な意図を最も良く表しているものと当時は考えられてきたからです。

一方、これはバッハによって実際に演奏された《ヨハネ受難曲》ではありませんでした。21世紀になり音楽学の研究も進み、後世の校訂者によって「最終稿」としてまとめられた作品とはまた違った意味で、バッハによって実際にライブツィヒの聖トーマス教会で（ちょうど300年前に）演奏された記録が残る《ヨハネ受難曲》「第二稿」を取り上げて演奏することの興味、そして価値は高まっていると考えています。

1950年のバッハ没後200年を記念する事業の際に発刊された小エッセー集の中で、高名な学者であり牧師であったM.J. ナウマンは次のように書いています。

「私たちはルターの説教を聞くことはできない。私たちは、過去の栄光ある偉大な説教者たちの説教を読むように、彼の説教を読むのみである。しかしながら、私たちはバッハの説教を聴くことができる。彼以外の偉大な音楽家の作品は私たちに語りかけるが、バッハの作品は私たちに説教するのである。」(R.A. リーヴァー著 荒井章三訳『説教者としてのJ.S. バッハ』(2012年 教文社刊) p.42に引用)

ちょうど300年前にバッハによって実際に演奏され、ドイツの教会に響いたであろう《ヨハネ受難曲》「第二稿」による説教を、本日じっくりとご体験ください。

註

- 1 ポリフォニック……………「多声的」の意。各パートが同時進行的に同じリズムで進むのではなく、一つのテーマが声部ごとにずれながら展開するような音楽のスタイル。
- 2 アリオソ …………… 器楽伴奏付きの朗読（レチタティーヴォ）。
- 3 対照的（シンメトリー）… 合唱→レチタティーヴォ→《第22曲コラール》→レチタティーヴォ→合唱…といったように、このコラールの前後で楽曲の配置が対照的に配置されているということ。
- 4 オブリガート楽器 …………… 主旋律と競うように演奏される旋律的な伴奏の楽器
- 5 フィグール …………… 特別な音の使い方あるいは音型の定型を使うことで、それぞれがある情念や事柄を象徴するとされていた。



## 伊藤 陽平 ITO Yohei / 福音史家 (テノール)

岩手大学教育学部学校教育教員養成課程卒業。同大学院教育学研究科修了。声楽を佐々木正利氏に師事。大学院修了時におけるシューマン歌曲集『詩人の恋』の演奏は秀逸で、折しも来盛していた東京藝大教授をして、藝大大学院を凌駕する感動的なドイツリートと唸らせた。その音楽センスと確かなドイツ語ディクシオンを駆使して、これまでにシュッツ『ヨハネ受難曲』『音楽による葬送曲』の福音史家、ブラームスの『ジプシーの歌』をはじめ、ドイツ音楽へのアプローチは比類なきものと絶賛され、その確かな様式感と技術により、バッハ『マニフィカト』、モーツァルト『レクイエム』等々のソロを務め好評を博している。来年3月、すみだトリフォニーホール（東京）において『マタイ受難曲』福音史家としてもデビュー予定。現在、岩手県の中学校教諭として勤務する傍ら、テノール歌手、また合唱指導者として将来を囑望されている。



Ayane Shindo

## 田中 雅史 TANAKA Masafumi / イエス (バリトン)

岩手大学教育学部芸術文化課程卒業。東京藝術大学大学院修士課程声楽専攻を首席修了。併せて大学院アカンサス音楽賞、小川尚子賞海外派遣奨学金を受賞。ウィーンにて短期研修を積む。令和2、3年度公益財団法人野村学芸財団奨学生。第34回奏楽堂日本歌曲コンクール歌唱部門第1位、中田喜直賞、木下記念賞（金メダル）受賞。第93回日本音楽コンクール声楽部門（歌曲）第3位受賞。これまでに《第九》、《メサイア》、《ドイツ・レクイエム》、《宗教カンタータ》等でソリストを務める。オペラでは5月、新国立劇場主催公演《小さな煙突掃除》ボブトム役にてデビュー予定。2025年よりバッハ・コレギウム・ジャパン声楽メンバー。



## 鈴木 集 SUZUKI Tsudoi / ピラト (バス)

山形県鶴岡市出身。山形大学、同大学院修了。山形県生涯学習文化財団鑑賞普及事業「魔笛」パパゲーノ、仙台オペラ協会「ドン・ジョヴァンニ」標題役客演他、「ドン・パスクアレ」マラテスタ役、「メリー・ウィドウ」ダニロ伯爵役等出演。山形交響楽団第282回定期演奏会ブルックナーミサ曲第3番をはじめカルミナ・ブラーナ、上田益作曲レクイエム、イタリアマドリガーレ、バッハ作曲カンタータ等ソリストを務める。藤原歌劇団準団員。山形オペラ協会会員。アポロ音楽院声楽講師。山響アマデウスコアコンサートマスター。Cantores Polarisメンバー。女声合唱団ささゆり、上山混声合唱団フロイデ、山形大学混声合唱団、RHEINBERGER Chor Nagai 各指導・指揮。



## 荒井 涉吾 ARAI Shogo / アリアとペテロ (バス)

宮城県名取市出身。宮城県仙台南高等学校、岩手大学教育学部芸術文化課程音楽コース、東京藝術大学音楽学部声楽科を卒業。二期会オペラ研修所マスタークラス修了。予科修了時に奨励賞を受賞。《ゴジ・ファン・トゥッテ》グリエルモ、《リタ》ガスパロ、《ラ・ボエーム》マルチェッロ、《電話》ベンなどで出演。また声楽分野を中心に創作活動も行っており、これまでに自作曲の発表のほか、合唱編曲の依頼を受け数多く手掛けている。声楽を松尾英章、佐々木正利、萩原潤、佐野正一の各氏に師事。二期会準会員、おはなしきいたりいな団員。



## 川嶋 容子 KAWASHIMA Yoko / アリアと端女(ソプラノ)

香川県高松市出身。香川県立高松高等学校卒業。東京藝術大学音楽部声楽科を経て同大学院修士課程独唱科修了。

E.マティス女史マスタークラス受講。声楽を嶺貞子、川上洋司の各氏に師事。ヴィヴァルディ「グローリアミサ」、ヘンデル「メサイア」、ハイドン「四季」、モーツァルト「戴冠ミサ」、ベートーヴェン「第九」、マーラー「交響曲第4番」、などのソプラノソリストを務める。

また、雅声会において工藤和子氏に師事し、日本歌曲の演奏活動も精力的に行っている。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン会員。



## 在原 泉 ARIHARA Izumi / アリア (アルト)

弘前大学教育学部音楽科を経て、岩手大学大学院修士課程修了。声楽を渡邊一夫、小森輝彦、佐々木正利各氏に師事。日本声楽コンクール、大仙市大曲新人コンクール、東京国際声楽コンクールにおいて上位入賞を果たす。

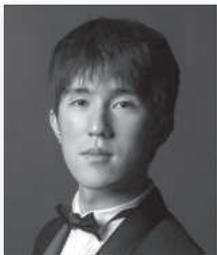
2012年、歌劇「さまよえるオランダ人」マリー役でデビュー以降、数多くのオペラ公演に出演、幅広い役柄を表現力に富んだ歌唱で演じ聴衆を魅了している。また、オペラだけにとどまらず、モーツァルト「レクイエム」、バッハのカンタータなどの宗教曲やベートーヴェン「第九」のソリストとしても、数々の著名な指揮者、オーケストラとの共演で活躍している。



## 西野 真史 NISHINO Masafumi / アリアと下僕(テノール)

盛岡第一高等学校卒業。岩手大学教育学部卒業、同大学院修了。声楽を多田羅迪夫、佐々木まり子、佐々木正利の各氏に師事。ベートーヴェン「第九」、モーツァルト「レクイエム」の宗教曲、オペラの分野でもヴェルディ「椿姫」で山形交響楽団と共演、幅広いレパートリーでのソロ活動で好評を得ている。さらにアンサンブル合唱活動でも県内外で活躍中。バッハ作曲「ヨハネ受難曲」のソロにて、指揮のペーター・シュライヤーに絶賛された。

グルッペ・ベッヒライン、日本声楽発声学会各会員。混声合唱団北声会常任指揮者。盛岡大学、同短期大学部非常勤講師。



## 及川 泰生 OIKAWA Taisei / アリア (バス)

岩手県出身。岩手大学教育学部を卒業後、東京藝術大学声楽科を経て、現在、同大学院声楽専攻3年次に在籍。第73回、74回藝大メサイア、藝大合唱定期ドヴォルザーク〈スターバト・マーテル〉、第41回台東第九公演にバスソリストとして出演。第100回二期会研修所コンサートに出演。

これまでにグノー〈聖チェチーリアミサ〉やバッハのカンタータなどのソリストを務める。令和6年度福島育英会奨学生。盛岡バッハカンタータフェライン、日本声楽発声学会会員。声楽を小原一穂、佐々木正利、米谷毅彦、萩原潤の各氏に師事。



## 渡辺 修身 WATANABE Osami / 副指揮

北海道旭川市出身。国立音楽大学声楽科卒業後、桐朋学園大学オーケストラ研究生として指揮を学ぶ。声楽を益田道昭、指揮を岡部守弘、紙谷一衛、飯守泰次郎の各氏に師事。

東京室内歌劇場等の各公演の副指揮者を務めた後、1993年渡独。アーヘン市立歌劇場にて音楽監督アシスタント、ライン・ドイツ・オペラ歌劇場にて合唱指揮者アシスタントを務めた。在独中、バッハ・アカデミー等のマスタークラスにて研鑽を積む。2001年帰国。

現在、山形大学地域教育文化学部教授。山響アマデウスコア指揮者。日本音楽表現学会会員、日本声楽発声学会理事。

## 仙台宗教音楽アンサンブル / 管弦楽

ヨハネ受難曲演奏会のために編成された特別アンサンブル



### 神谷 未穂 KAMIYA Miho / コンサートミストレス (第1ヴァイオリン)

桐朋学園大学、ハノーファー国立音大、同大学ソリストクラスをそれぞれ首席卒業。パリ国立高等音楽院最高課程修了。

国内外のコンクール多数入賞。仙台フィル、千葉響コンサートマスター、宮城学院女子大学特命教授、音楽による復興センター・東北理事、デュオ・プリマ、アンサンブル・マレッラ、クワテュール・ディゼール、クアルテット・パトナ、仙台ジュニアオーケストラ講師、地域創造の協力アーティスト等で活動。宮城県芸術選奨受賞。

<https://www.mihokamiya.net>



### ネストル・ロドリゲス Nestor Rodriguez / 第1ヴァイオリン

エルサルヴァトル（中米）生まれ。エルサルヴァトル国立芸術センター卒業後、1979年エルサルヴァトル国立交響楽団に入団。1981年、居を日本に移し、宮城フィルハーモニー管弦楽団（現 仙台フィルハーモニー管弦楽団）に入団。2024年3月仙台フィルを退団。

宮城フィルから仙台フィルへ変遷する中、すべての歴代指揮者と演奏を重ね、とりわけパスカル・ヴェロ氏との出会いは特別なものがあった。第290回定期において、祖父の作品である交響詩『エルヒボア』の日本初演を果たす。在団中より、室内楽において特に弦楽四重奏に力を入れている。



### 平松 典子 HIRAMATSU Noriko / 第1ヴァイオリン

仙台市出身。京都市立堀川高校音楽科、桐朋学園大学演奏学科卒業。

現在は、オーケストラの客演奏者を務めるほか、さまざまなコンサートに招かれ多くの演奏家と共演している。

また、アウトリーチや動物保護活動のためのチャリティーコンサートへの参加、後進の指導など地域に根差した活動も積極的に行っている。

宮城県芸術協会会員。



### 須藤 遥 SUDO Haruka / 第1ヴァイオリン

仙台市出身。4歳よりヴァイオリンを始める。常盤木学園高等学校音楽科を経て、京都市立芸術大学音楽学部を卒業。第51回卒業演奏会に出演。

第13回バッハホール音楽コンクール最優秀賞及びバッハホール音楽賞受賞。仙台ジュニアオーケストラに在籍し、卒団後ソリストとして共演。

これまでにヴァイオリンを今野舞、長谷川康、藤川幸、小川有紀子、大谷玲子の各氏に、ヴィオラを小峰航一に師事。現在宮城県を拠点に、仙台フィルハーモニー管弦楽団エキストラ出演等幅広く活動している。



### 松山 古流 MATSUYAMA Koryu / 第1ヴァイオリン

福島県喜多方市出身。

東京音楽大学在学中より、新ヴィヴァルディ合奏団のViolin・Viola奏者として百回を超えるコンサートに出演。

今年3月まで、40年間仙台フィルハーモニー管弦楽団で1st Violin奏者を務める傍ら、同楽団のメンバーと「カルテット・フィデス」を結成し、数多くのコンサートや復興支援の演奏活動を行なう。

## 仙台宗教音楽アンサンブル / 管弦楽

演



### 川又 明日香 KAWAMATA Asuka / 第2ヴァイオリン

3歳からヴァイオリンを始める。桐朋女子高等学校音楽科、上野学園大学音楽学部を経て、ジュネーヴ州立高等音楽院修士課程ソリストコース修了に際し Maggy Breittmayer 賞を受賞。第2回仙台国際音楽コンクール審査委員特別賞。第37回茨城県新人賞受賞。

2019年11月NHK BSプレミアム「クラシック倶楽部（無言館・祈りI～戦後75年戦没画学生慰霊美術館から～）」に出演。

ヴァイオリンを原田幸一郎、矢部達哉、ミハエラ・マルティンの各氏に師事。

仙台フィルハーモニー管弦楽団第2ヴァイオリン首席奏者。



### 木越 直彦 KIGOSHI Naohiko / 第2ヴァイオリン

仙台市出身。桐朋学園大学音楽学部演奏学科卒業。

1981～83年、ドイツミュンヘン音楽大学に留学。これまでに、中塚 久、小林健次、久保田良作、ハインツ・エンドレスの各氏に師事。

1984年、仙台フィルハーモニー管弦楽団（当時宮城フィル）に入団。2022年3月末日、定年により退団。

ソリストとして、尚絅学院大学管弦楽団、ヒロムジカ・カンマー・オーケスター（青森県弘前市）、宮城教育大学交響楽団と、協奏曲等を共演。



### 浅野 裕里香 ASANO Yurika / 第2ヴァイオリン

仙台市出身。桐朋女子高等学校音楽科を経て、桐朋学園大学音楽学部卒業。同大学研究科を修了。海外の国際音楽アカデミーに多数参加し、研鑽を積む。

2007年 バッハホール音楽コンクール最優秀賞。全日本芸術コンクール第2位。2012年 日本イタリア協会コンクール優勝。同年、Teatro Olimpico 国際フェスティバルをはじめ、イタリア各地で特別演奏会に出演し、好評を博す。

現在は、ソロ、室内楽、仙台フィルハーモニー管弦楽団に客演など、幅広く演奏活動を行っている。

昭和音楽大学附属音楽教室仙台校講師。宮城県芸術協会会員。



### 小野 英駿 ONO Hidetoshi / 第2ヴァイオリン

宮城県利府町出身。

5歳からバイオリンを始める。小学5年生から桐朋学園大学音楽学部附属子供のための音楽教室仙台教室に通い、常盤木学園高等学校音楽科卒業。桐朋学園音楽大学を経て特待生として奨学金を得て、洗足学園音楽大学入学、卒業。

在学中、安永徹氏の特別レッスンオーディションに合格、受講。

第19回全日本クラシック音楽コンクール第4位。

第14回バッハホールコンクール金賞受賞。

現在は東北地方を中心に、ソロ、室内楽、オーケストラなど幅広いジャンルで活動している。現在までにヴァイオリンを志賀恵子、木野雅之、澁谷由美子の各氏に、室内楽を川田知子、羽川真介、安永徹・市野あゆみの各氏に師事。

Fontana カルテットメンバー。

## 仙台宗教音楽アンサンブル / 管弦楽



### 小畑 善昭 OBATA Yoshiaki / オーボエ

東京藝術大学音楽学部卒業。在学中の1973年毎日音楽コンクール（現日本音楽コンクール）管楽器部門第3位。同大学院音楽研究科オーボエ専攻修了。1979～82年まで東京交響楽団に在籍後、85年までベルリンに留学。1985～90年新日本フィルハーモニー交響楽団首席奏者を経て、90年に東京藝術大学助教授となり後進の指導にあたる。独奏・室内楽、また古楽器奏者としても演奏活動を繰り広げている。現在、東京藝術大学名誉教授。



### 岡 北斗 OKA Hokuto / オーボエ

愛知県立芸術大学卒業。東京藝術大学大学院修士課程修了。その後ベルリンへ留学。ベルリン国立歌劇場管弦楽団首席オーボエ奏者G. ヴィット氏に師事。ドイツ国立ロストック音楽・演劇大学にて国家演奏家資格を取得し帰国。藝大フィルハーモニア管弦楽団を経て現在、新日本フィルハーモニー交響楽団首席オーボエ奏者。横浜シンフォニエッタメンバー。愛知県立芸術大学及び桐朋学園大学非常勤講師。



### 阿部 博光 ABE Hiromitsu / フルート

東京藝術大学卒業。第45回日本音楽コンクールフルート部門入選。在学中に日本フィルハーモニー交響楽団へ入団。首席奏者を務める。1982年文化庁芸術家在外研修員として、スイスのバーゼル市に留学。P・L・グラーフ、R・メラーンの両氏に師事。1995年北海道教育大学岩見沢校に赴任。現在、北海道教育大学名誉教授。札幌大谷大学特任教授。

これまでに札幌市民芸術祭大賞、札幌芸術賞を受賞。故小松昭五、細川順三、三村園子、故小泉剛、故吉田雅夫の各氏に師事。1997年HBCジュニアオーケストラ常任指揮者に就任。札幌フルート協会会長。日本フルート協会副会長。



### 櫻井 希 SAKURAI Nozomi / フルート

宮城教育大学音楽教育専攻を卒業。第155回日演連推薦新人演奏会において仙台フィルハーモニー管弦楽団と共演。第2回三田ユネスコフルートコンクール第2位（1位なし）及び三田市長賞受賞。第10回仙台フルートコンクール一般部門第1位。第20回浜松国際管楽器アカデミーにおいて、Best Performance Awardを受賞。平成27年度宮城県芸術選奨新人賞を受賞。

現在、ヤマハミュージックジャパン・インストラクター、宮城県芸術協会会員、仙台フルート協会、各会員。



### 西口 真央 NISHIGUCHI Mao / ファゴット

東京藝術大学音楽学部器楽科を卒業。卒業時に同声会賞を受賞。桐朋オーケストラ・アカデミー修了。これまでにファゴットを井上俊次、岡崎耕治、岡本正之、神山純の各氏に師事。

第2回K木管コンクールにてグランプリ第2位（1位なし）、及び大学生ファゴット部門第1位受賞。第2回ファゴットコンクール第1位受賞。第39回管打楽器コンクール第2位受賞。

小澤征爾音楽塾オペラ・プロジェクト XVIに参加。同声会新人演奏会2020年に出演。仙台フィルハーモニー管弦楽団首席ファゴット奏者。

## 仙台宗教音楽アンサンブル / 管弦楽

演



### 成田 寛 NARITA Hiroshi / ヴィオラ

1986年に新日本フィルハーモニーに入団、約10年在籍。その間89年～90年、93年～94年の二度に渡りオランダのデン・ハーグ王立音楽院に留学、V.メンデルスゾーン氏に師事。またKISA弦楽四重奏団のメンバーとして95年～97年、秩父及びロンドンでの「アマデウス・クアルテット・セミナー」に定期的に参加しアマデウス・クアルテットのメンバーより薫陶を受け、ロンドン・ロイヤル・ポートレートギャラリーに於ける演奏会等に出演。その後、新星日本交響楽団の首席奏者に就任、合併後東京フィル首席奏者を2003年まで務めた。

現在は山形交響楽団契約首席を務める他、鈴木秀美、若松夏美、寺神戸亮、有田正広、L・コッポラ、S・ホッホランドの各氏等との室内楽での共演、楽遊会弦楽四重奏団やオーケストラ・リベラ・クラシカ、バッハ・コレギウム・ジャパン等のメンバーとして活動している。



### 梅田 昌子 UMEDA Masako / ヴィオラ

東京都立芸術高校音楽科卒業、東京藝術大学音楽学部器楽科ヴィオラ専攻卒業、同大学院修士課程修了。6歳よりヴァイオリンを奥田富士子、故兎東龍夫、海野義雄、各氏に師事。16歳よりヴィオラに転じ、岸優子、故浅妻文樹、各氏に師事。1982年同声会新人演奏会に出演。1985年石橋メモリアルホールにてソロリサイタルを催す。

1987年宮城フィルハーモニー管弦楽団(現・仙台フィル)に入団。1991年プラハに留学。チェコフィル首席ヴィオラ奏者 ヤロスラフ・モトリーク氏に師事。

1993年、2025年3月仙台にてソロリサイタルを催す。2025年3月仙台フィルハーモニー管弦楽団を退団。現在、宮城学院女子大学音楽科、仙台白百合学園小学校講師。



### 柴生田 桂子 SHIBOUTA Keiko / ヴィオラ

仙台市出身。桐朋学園付属女子高等学校音楽科より同大学を卒業。江藤俊哉氏に師事。その後ドイツ、デトモルト音楽大学に留学。

仙台フィルハーモニー、東京シティフィルハーモニー、スイス、リンツ・ブルックナーオーケストラなど内外のオーケストラと協演。

その他、ソロ、室内楽の演奏会を多数行っている。仙台を拠点に後進の指導にも意欲を示している。



(photo/A.Muto)

### 田崎 瑞博 TASAKI Mizuhiro / ヴィオラ・ダ・ガンバ

東京藝術大学卒。ヴァイオリンを桑田晶、兎東龍夫、山岡耕筈、外山滋に師事。チェロや各種古楽器を独学し、室内楽を中心に活躍。CDを多数リリース。

「古典四重奏団」チェロ奏者として、文化庁芸術祭大賞、ENEOS音楽賞奨励賞(旧モービル音楽賞)、「レコードアカデミー大賞」など各受賞。

「タブラトゥーラ」のフィーデル奏者として欧州などで公演。

アンサンブル「音楽三昧」の編曲者・ヴィオラ・チェロ奏者として「サライ大賞」受賞。



### 八島 珠子 YASHIMA Tamako / チェロ

福島市出身。福島女子高校入学と同時に同校管弦楽部でチェロを手にする。京都市立芸術大学音楽学部卒業。チェロを故・佐藤修、伊東毅、上村昇の各氏に師事。室内楽を岸邊百百雄、故・種田直之の各氏に師事。スロバキアにてヨーゼフ・ポドランスキーのレッスンを受ける。

現在仙台フィルハーモニー管弦楽団団員、宮城学院非常勤講師、仙台市ジュニアオーケストラ講師として活動するとともに、室内楽、ソロ、後進の指導の分野に於いても活動中。



三宅 進 MIYAKE Susumu / チェロ (通奏低音)

桐朋学園、米インディアナ大にて、安田謙一郎、木越洋、ヤーノシュ・シュタルケルの諸氏に師事。イソ弦楽四重奏団、新ヴィヴァルディ合奏団、群馬交響楽団首席を経て、現在 仙台フィルハーモニー管弦楽団ソロ首席奏者。全国主要オケへの首席客演、ソロ、室内楽、ヨーロッパ、アジア等海外での演奏も多い。武蔵野音楽大学で後進の指導にもあたる。仙台市宮城野区文化センター主催の室内楽シリーズ Music From PaToNa では音楽監督を務め、室内楽を仙台に根づかせた功績を高く評価されている。同シリーズはウィーン・フィル&サントリー音楽復興祈念賞を受賞。tbcラジオ「エンジョイ!クラシック」ではパーソナリティを務める。



田中 洸太郎 TANAKA Kotaro / コントラバス

北海道恵庭市出身。北海道教育大学札幌校音楽科卒業。桐朋学園大学音楽学部研究科を修了後に渡独、ライプツィヒ音楽演劇大学マスター課程で学ぶ。コントラバスを藤澤光雄、西田直文、Frithjof-Martin Grabner の各氏に師事。これまでに小澤征爾音楽塾に参加、桐朋オーケストラ・アカデミー研修課程を修了し、Carl Fresch Akademie Baden-Baden では奨励賞を受賞。現在は仙台フィルハーモニー管弦楽団コントラバス奏者として活動するほか、仙台ジュニアオーケストラの講師も務める。



渡辺 真理 WATANABE Mari / オルガン

宮城学院女子大学音楽科卒業。主にピアノを故 W.S. カンディフ、パイプオルガンを故伊澤長俊、佐藤ミサ子、伴奏法を金井紀子の各氏に師事。これまで多くの声楽家、合唱団と共演。また、山形交響楽団をはじめオーケストラの鍵盤奏者、通奏低音奏者としても各地で演奏活動をしている。東北学院大学、尚絅学院大学、日本基督教団仙台東一番丁教会礼拝オルガニスト。日本オルガン研究会、日本演奏連盟、宮城県芸術協会各会員。仙台宗教音楽合唱団練習ピアニスト。



平野 智美 HIRANO Tomomi / チェンバロ

東京藝術大学卒業、同大学院修了。文化庁芸術家在外研修員としてイギリスに派遣され研鑽を積む。第13回国際古楽コンクール<山梨>最高位受賞。演連コンサートにて、東京文化会館で室内楽リサイタルを開催。2005年文化庁ニューアーティストシリーズに選出される。ハイニヘン「新しい通奏低音奏法」翻訳書にて、リアリゼーションを担当するなど幅広く活動する。2016年～2018年国立音楽大学講師。現在、千葉経済大学短期大学部講師。CD「《1685》後期バロックの3巨匠 —スカルラッティ、ヘンデル、バッハ—」(音楽現代推薦盤)、「バッハ×ピアソラ」(レコード芸術準特選盤)リリース。

※チェンバロは、ハヤシチェンバロ製作所製を使用しています。



## 佐々木 正利 SASAKI Masatoshi / 指揮者

東京藝術大学音楽学部声楽科卒業。同大学院修士課程及び博士後期課程修了。1980～82年デトモルト北西ドイツ音楽大学に学ぶ。

1973年バッハの福音史家で楽壇デビュー以来、国際的バッハ歌手として数々の大舞台に出演。1980年第6回ライプツィヒ国際バッハコンクール声楽部門第5位入賞。特に1980年ウィーン楽友協会でのマタイ受難曲や1985年ザルツブルグ音楽祭でのマニフィカト等指は「世界最高のバッハ歌手の一人」と絶賛された。ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団、ベルリン交響楽団、ロンドン・フィルハーモニー管弦楽団、ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団、アムステルダム・フィルハーモニー管弦楽団、国立ブカレスト交響楽団、NHK交響楽団等、国内外のトップオーケストラと共演。ライプツィヒ聖トマス教会聖歌隊、シュトゥットガルト・ゲヒンゲン聖歌隊、ベルリン聖ヘドヴィッツ聖歌隊、RIAS室内合唱団等、世界的合唱団のソリストを度々務め好評を博す。在独中ウエストファーレン州立歌劇場等で「コジ・ファン・トゥッテ」「フィデリオ」「グリゼルダ」等出演。

1970年東京藝術大学バッハ・カンタータ・クラブの創設に携わり指揮者としての活動を開始。以後50年以上に亘って主に宗教曲の演奏に冴えをみせ、特に世界的バッハ演奏家H. ヴィンシャーマン率いるドイツ・バッハゾリステンの演奏会では、ソリストとしてだけでなく自身が育てた合唱団も度々共演し、その歌唱力・合唱指導力によって絶大な信頼を勝ち得た。とりわけ盛岡バッハ・カンタータ・フェライン、仙台宗教音楽合唱団、岡山バッハ・カンタータ協会等を率いての20数回に亘るドイツをはじめとする欧州公演では『シュッツ、バッハの世界的担い手』とした最大級の賛辞が新聞各紙に掲載された。1982年日本に戻ってから約40年間、多くの国際的歌手を育て上げ、また大学教授など多くの優れた指導者を輩出している。1987～88年には、H. リリング音楽監督のバッハ・アカデミーにて、テノールマスタークラスの講師を務め、またコダーイ・サマースクールや古楽サマースクール等でも指導講師に招かれるなど、その指導力についても世界的に定評がある。1994年長年にわたる顕著な演奏・教育の業績に対し、第47回岩手日報文化賞が贈られ、また2011年には日独交流150周年を記念してドイツ大使館より日独友好賞（功労賞）が贈られた。2024年6月には世界の著名なバッハ演奏家たちがバッハ演奏を繰り広げるライプツィヒ・バッハ音楽祭に招かれ、バッハ・カンタータ・フェライン東日本（盛岡・仙台・山形の合唱団有志で組織）を率いて、カンタータ3曲を演奏、世界から絶賛された。

現在、岩手大学名誉教授。日本声楽発声学会会長他、複数の学会の要職を務める。二期会会員、バッハ・バロック研究会講師。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン、仙台宗教音楽合唱団、岡山バッハカンタータ協会、東京21合唱団、佐々木正利バッハコア、バッハ・アンサンブル富山の各指揮者。山響アマデウスコア、豊中市民第九合唱団の各音楽監督。熊友会ヴォーカル・アンサンブル代表。

現在、岩手大学名誉教授。日本声楽発声学会会長他、複数の学会の要職を務める。二期会会員、バッハ・バロック研究会講師。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン、仙台宗教音楽合唱団、岡山バッハカンタータ協会、東京21合唱団、佐々木正利バッハコア、バッハ・アンサンブル富山の各指揮者。山響アマデウスコア、豊中市民第九合唱団の各音楽監督。熊友会ヴォーカル・アンサンブル代表。



## 『マタイに向けての試金石』



佐々木 正 利

皆さま、盛岡バッハ・カンタータ・フェライン（以下、「フェライン」と略）『ヨハネ受難曲演奏会』にお越しくださしまして心より御礼申し上げます。指揮者の佐々木正利です。

思えば5年前、私たちは『東北3都市 マタイ受難曲 特別演奏会』と銘打って、2020年の5月4、5、6日に山形、仙台、盛岡と三日連続のマタイ公演を企画し、総力を上げて取り組んでいたものでした。それが世界的な未曾有の災禍「コロナ禍」に見舞われまして、無念の中止に追い込まれてしまいました。時の移り変わりは早いもので、あれからもう5年も経過してしまいました。しかし、私たちのマタイ上演に掛ける想いはそれこそ半端なものではなく、いつの日か必ず復活上演したいものと虎視眈々と機会を窺い、安易に挫けることなく、気持ちを繋ぎ活動を継続してまいりました。

とは申しても、さすがにマタイは大曲です。演奏者の編成を見ても、二つのフルオーケストラと二つの合唱（独立したコーラルパートを加えてトータル9声部）、最低でも7人のソリストが必要で、余談になりますが、私たちと同様に5年前にマタイ上演を目指していて頓挫せざるを得なかった、佐々木バッハセミナー記念合唱団は、来年2026年3月15日に（於：東京すみだトリフォニーホール）名前を佐々木正利バッハコアと変えて復活公演する運びとなりましたが、そこでは何と12人のソリストを起用します。これほどの規模で、演奏時間もトータルで優に2時間30分を超えますので、世の中の数多くの合唱団同様、ご多分に洩れずコロナ禍で団員数が激減したフェラインでしたので、おいそれと復活公演にたどり着くこと能わず、しかしながらそれでも簡単に諦めることなく、佐々木のアイデアと会員（フェラインでは仲間を団員と呼ばず会員と呼んでいます）の努力を結集して、無聴衆、入場無料を基本とし、次へのつなぎとして、兼ねてより遂行していた、全曲を何回かに分けての『マタイへの旅』レクチャーミニコンサートを、ソロもみな全て会員が受け持ち継続してきました。

実は、2020年という年はフェラインにとっては大変な年で、大曲マタイ受難曲公演遂行と共に、バッハを歌う合唱団としては一世一代の大勝負と言っている超ビッグイベントが同時進行していたのでした。と申しますのは、バッハゆかりの地ライプツィヒで毎年6月に繰り上げられる『バッハ音楽祭』に、フェラインは世界的に名立たる各地の名演奏団体に混じって招待を受けていたのです。しかもそのオープニングコンサートでバッハの復活祭オラトリオを演奏してほしいというもの。大変な栄誉とはいえ、果たしてマタイと並行して私たちはちゃんと取り組んでいけるのか、甚だ自信のないことではありました。しかしバッハ歌いの合唱団として、見すみすこのビッグチャンスを見逃す手はありません。やってやろうじゃないかと腕捲りして懸命に取り組んでいた矢先の、コロナ蔓延でした。結局、外国どころか県外への移動もまかりならんという非常事態に巻き込まれ、マタイと共に我々のバッハ音楽祭出演も水の泡と帰りました。ところがです。マタイ上演は全く見通し立たずの諦心の体となりましたが、神さまは完全に我々を見捨ててはいませんでした。と申しますのは、何と2022年のバッハ音楽祭への招待が再び舞い込んだのです。しかもプログラムは2020年と同じ復活祭オラトリオ。何という奇遇でしょう。コロナ禍からの復活を期す我々にとっては願ってもないチャンスが再び転がり込んだのですから。しかし世情は簡単には好転する兆しはありません。いつ終わるかとも見通すことのできないコロナ禍はまた我々に蓋をしてしまいました。私は、泣く泣くの体でバッハ音楽祭事務局に再び断りのメールを送りました。さすがの事務局も、1回目の断りは理解してくれたでしょう。しかし、2回目となると……。無念の涙を流しました。ところがです、ここに奇跡が起こったのです。何と傷心の我々のところに3度目のオファーが舞い込んだのですから。2024年への出演依頼です。聞



くところによりますとこの出演交渉は2年先ごとするそうで、2022年秋に届いたこの<sup>揮</sup>ファー、その頃にはさすがにコロナも下火になっているでしょうから、といった文言で始まっていました。但しプログラムは変わっていました。バッハが1723年にライプツィヒに赴任しての2年目より、コラールカンタータの創作に勤しみ、2024年はその記念すべき300年の節目の年ということで、コラールカンタータ3曲（BWV10,93,177.）を演奏してほしいというものでした。このオファーは我々にとっては晴天の霹靂とも言える、涙枯れるほど嬉しいものでした。ライプツィヒはフェラインを忘れてくれはしなかった。300年という年月と1万キロメートルという距離と、宗教と文化の違いをもってしてもフェラインをバッハの友としてくれたのだ。筆舌に尽くし難い感動が我々を襲いました。だがしかし、ここにまた新しい障害が立ちはだかります。ご存知のように、フェラインは一般合唱団です。会員は皆それぞれの生業を持っており、6月の普通日のウィークデイに1週間も休みを取れる会員は限られています。しかもコロナ禍で会員数自体が激減してるのです。それでも人数的には集められましようが、音楽的戦力を考えますと誰でもどうぞというわけにはまいりません。そこで私は二つの戦略を考えました。一つは、オファーは“Bach-Kantatenverein, Morioka”宛に届いたのですが、私は志を同じくする同志たちを加えるべく“Bach-Kantatenverein, Ostjapan”、すなわち盛岡バッハ・カンタータ・フェラインではなくて、東日本バッハ・カンタータ・フェラインとしてオファーを受けさせてくれないかと事務局に直談判することでした。返事はすぐに来ました。佐々木が普段指導している者たちの集合体で、佐々木が責任を持って音楽作りをするというのなら何ら問題はないというものでした。それ以来、バッハ音楽祭公式プログラムには“Bach-Kantatenverein, Ostjapan”が載るようになりました。そして盛岡だけでなく仙台、山形、東京の私の指導を受けている仲間（Verein）たちが盛岡や仙台での合同練習に臨み、一緒に渡独しました。今一つの戦略は、かつて『マタイへの旅』と称して実施していたレクチャーミニコンサートを、今度は『ライプツィヒへの旅』と名称替えして小本番を積み重ね慣れ親しんでいくことにしたことです。これは功を奏しました。本番のカンタータは3曲ともコラールが主体の秀曲ではありますが、全貌はなかなか掴みにくい難点があります。このミニコンサートに向けての切磋琢磨を通じて、我々はカンタータに馴染むだけでなく愛着を憶え始め、それを自然体でライプツィヒでの演奏に繋げることができました。結果は、普通教会でのコンサートは Solo Deo Gloria（ただ神のみに栄光あれ）の精神に則って拍手はないものなのですが、終演後はスタンディングオベーションが延々と続いたことからわかります。教会の外では、世界中から集まった聴衆が我々を待ち受け、言葉もわからないのに涙を浮かべてハグしてくれたのですから、無理しても行って良かったなと至福を感じることとなりました。

このように、私たちは昨年6月に、ドイツはバッハの聖地ライプツィヒにおける『バッハ音楽祭』で、現地の指揮者、ソリスト、オーケストラとカンタータ3曲（BWV10,93,177.）を演奏し好評を博したわけですが、その折、マルクト広場での野外ステージでは、ヨハネ受難曲（1749年総譜版）が手話、パントマイム付きで上演され、我々は石畳に体育座りで耳を傾け、オペラさながらの迫真のイエスの捕縛場面に衝撃を受けたのでした。

さて、バッハは、後半生を過ごしたライプツィヒの街に1723年に赴きましたが、その翌年の1724年の受難週のためにこのヨハネ受難曲を作りました。その3年後の1727年にマタイ受難曲を作るわけですが、当時の教会では「教理を告知する」ことが主眼になっていましたし、聖金曜日の礼拝時間にも制約がありましたので、マタイのような個人の信仰にまつわる瞑想的な内容を盛り込むには、バッハとてまだ勇気が湧かなかったかもしれません。このようにヨハネは、教会において客観的な内容、



要するにドグマティック（教理的）な面が強く、怒りと人間の残忍さが強調され攻撃的な側面が顕著ですので、その音楽と相俟って聴いている人々は度肝を抜かれたに違いありません。いずれにせよ「ヨハネによる福音書」を書いたその人物（つまりヨハネ）は、イエスの愛弟子としてすぐ近くにおいて、その捕縛から磔刑まで間近に見ていたとされ、そこに描かれている民衆、祭司たち、ピラト、兵卒たちとイエスの間で交わされるやりとりは臨場感に富み、息を引き取るまでのイエスを取り巻く状況を直截的に生々しく伝えているのですが、信仰深かったバッハは、その中から様々な怒りの表情を拾い上げ、曲に組み込んでいったのだらうと思われます。それがヨハネ受難曲に苛烈な表現を与えているわけですね。

ところで、本日演奏される第2稿は、初演の翌年の聖金曜日（1725年3月30日）における上演稿ですが、冒頭合唱曲にコラール「おお人よ、汝の大いなる罪を嘆け」（この曲は後年、マタイ受難曲・改訂稿の第1部・終曲になったことでも知られています）、そして終曲コラール合唱「キリストよ、汝神の小羊」（バッハがトマス・カントール採用試験に提出したカンタータ BWV23 からの引用）と、バッハが両端楽章を大きなコラール合唱で飾ったことは、彼がその前の1年間にコラール・カンタータを多作したことと関係があるのではないかともいわれていますので、私たちが昨年コラール・カンタータ300年記念の年に招かれて演奏した、コラール・カンタータ年巻の最終に当たりますから奇縁を感じます。

このヨハネ受難曲では曲が始まるとともにいきなりイエスの捕縛の場面が登場します。そのため、聴く者にとっては最初から高い緊張が強いられます。また、合唱が占める割合がとても高いことがヨハネの特徴の一つになっています。この合唱は、聖書の言葉が語られる部分では群集の役割を担い、クライマックスにおけるそのテンポの速い対位的な歌声は、最早ピラトにしては抑制の効かない興奮した状況を醸し出し、一転してコラールは、この場面を聴いている会衆に自然と湧き出してくる信仰心の発露として心に染み入ってきます。第2部が始まってから、イエスの埋葬に至るまでの一連のドラマは、マタイ受難曲でも同じような流れに沿って描写されていきますが、ヨハネはアリアが少なく、福音史家（伊藤陽平）－イエス（田中雅史）－ピラト（鈴木集）－群集（合唱）の掛け合いを中心として進んでいきますので、より緊密な展開が繰り返されていくのです。今回、この部分の配役はみな初めて歌う者たちです。果たして、どれほど劇的に表現できるか。それだけでなく、ペテロ&アリア（B）：荒井渉吾、端女&アリア（S）：川嶋容子、下僕&アリア（T）：西野真史、アリア（A）：在原泉、アリア（B）：及川泰生も併せて全員、初挑戦です。密かに私は、このヨハネのクライマックスは、最終盤の3つのアリアと1つのアリオーゾ（第30、32、34、35曲）で強調されるキリストの臨終である、と確信していますので、在原、及川、西野、川嶋に期待しているところです。果たして、私の起用（抜擢）が吉と出るか、凶と出るか。ある意味では、私にとっても試金石です。

よ～し！期待と希望を持ってタクトを下ろすことにしましょう。なぜって、次はマタイが控えているからです。それまでは死ねません！

本日のアンコール、ヨハネ受難曲（1749年総譜版）No.40.Choral“Ach Herr, laß dein lieb Engelein”を我々の恩師 天国の故 Helmut Winnschermann 先生に捧げます。

2025年、4月29日記す

# 盛岡バッハ・カンタータ・フェライン



1977年に「J.S. バッハの教会カ<sup>ン</sup>タータの研究と演奏を通して音楽芸術を追求する」ことを目的に結成された。

当初より佐々木正利氏を指揮者として迎え、バッハの音楽の真髄に触れる活動を目指して多くの演奏会を行ってきた。ヨハネ受難曲は1985年、2007年、2017年に演奏して<sup>盛</sup>るが、第二稿の演奏は今回が初めてとなる。

これまでの演奏会では、客演指揮者としてH. ヴィンシャーマン、G. シュマールフス、D. ティム、K. マズア、H. リリング、D. エッテ

インガー、H. シェレンベルガー、H.J. ロッチュ、岩城宏之、飯森範親などを迎え、バッハからマーラーまで幅広い曲目を演奏してきた。また、現在までドイツへの演奏旅行を6回行い現地で高い評価を得ている。直近では、2024年6月にバッハ・アルヒーフの招待でドイツ、ライプツィヒで開催されたバッハ音楽祭への出演を果たした。

指揮者 佐々木 正利  
 ピアニスト 菊池 玲子  
 コンサートマスター 小原 一穂  
 佐々木 幹雄  
 コンサートミストレス 小川 暁美

ソプラノ	アルト	テノール	バス
◎ 赤塚 温子	◎ 在原 泉	加藤 進也	宇津野智成
大矢 克子	小笠原香澄	佐々木幹雄	及川 泰生
岡野美映子	小川 暁美	武田 宏	小原 一穂
小川 牧子	小野 京花	長岡 朋希	小菅 悠樹
小原 育世	桐原 絹子	中野 奏保	◎ 佐々木保雪
川嶋 容子	黒森 美里	新山 隆健	高橋 聡
熊谷 充代	佐々木 温	◎ 西野 真史	千田 敬之
熊澤 愛理	千葉ゆつき	吉谷地勝久	遠山 宜哉
昆 千晶	続石真奈美		芳賀 郁夫
斉藤 純子	藤澤 久子		
佐々木恵子	茂木 容子		
外崎 麻子	渡辺しをり		
藤原 弘子			
真下 祐子			
本良いよ子			
八木 絵未			
○ 山根 日和			
吉田真弥子			

◎ パートリーダー  
 ○ パートサブリーダー

## <ご協力に感謝します>

オルガン調整 中里 威  
 チェンバロ調律 林 裕希  
 字幕  
 舞台字幕／映像まくうち  
 スイッチャー 菅原 美穂  
 歌詞対訳 山岸 健一

ホームページ：  
<https://mbkverein.info/>  
 約50年間の演奏履歴を掲載しております





# 仙台宗教音楽合唱団



1967年創団。J.S. バッハや H. シュッツなどのドイツ・バロック期の宗教合唱曲の演奏を中心に活動してきた。1982年以降、佐々木正利氏を指揮者に迎え、バッハの「ヨハネ受難曲」「マタイ受難曲」「ロ短調ミサ曲」「クリスマス・オラトリオ」などの演奏を完遂。近年は、フォーレ、ブラームス、デュルフレ、ラター、イエイロといった近現代の宗教曲までレパートリーを広げている。また2013年より10年間、「3・11祈りのコンサート」の活動に参加し、毎年3月11日にモーツァルトの「レクイエム」の演奏を捧げてきた。2018年8月の第38回演奏会開催後、

2020年5月の「マタイ受難曲」特別演奏会に向けて準備を重ねてきたが、コロナ禍に見舞われ演奏会開催を断念。昨年、6年ぶりの主催演奏会を開催。「作品の本質に迫るためには“歌詞の深い表現とそこに込められたメッセージへの共感”を十全に表現することが大切であり、そのためにはまず“正確な発音・訓練された発声”と“正しい様式感”が不可欠である」という佐々木正利氏の指導のもと、様々なバックグラウンドを持つ団員が集まり、毎週練習を重ねている。

指揮者 佐々木 正利  
 ピアニスト 渡辺 真理  
 ヴォイスレナー 佐々木まり子  
                   中野 寛司  
 コンサートミストリス 鈴木 英美

委員長 北岡 倫典  
 副委員長 水戸 由貴子  
 副委員長 河原 清

ホームページ:

<http://classic.music.coocan.jp/cgms/>



チラシ・ポスターデザイン 河原 清

ソプラノ	アルト	テノール	バス
飯淵 正子	飯田真佐子	我妻 健太	飯田 若芳
石澤 悦子	伊藤 明子	伊藤 竜一	石川 賢
大友 利恵	植松 智穂	河原 清	佐久間良樹
小林 澄子	大場 啓子	北岡 倫典	宍戸多加志
近藤 順子	小坂 洋子	鈴木 博丈	杉井 智一
後藤 直子	今野 早苗	高瀬 重嗣	武田 宏之
高瀬 朋子	佐々木美智子	中村 洋	田村 高幸
高瀬 佳子	杉井 知子		山岸 健一
竹内 望	鈴木よしみ		♪ 渡辺 修身
♪ 田口 優実	鈴木 英美		
圓谷 範子	武田 匡子		
中村 佳世	沼倉 るみ		
中村 理恵	丸子 智子		
新妻 令子	水戸由貴子		
福田 良子	八尾 敦子		
三浦 香苗	柳父かほる		
山室ふさ子	山岸 美紗		

♪ 山響アマデウスコア

## 盛岡バッハ・カンタータ・フェラインの今後の活動予定



☆ 次回の演奏会は、来年 2026 年 11 月頃に計画しております。場所未定。

岡

指揮：佐々木 正利

曲目：① ドイツの早期バロックの巨匠ハインリッヒ・シュッツ作曲のマニフィカート  
② バッハと同時代人、膨大な数の作曲で知られるゲオルグ・P・テレマンのマニフィカート  
③ J.S. バッハのカンタータ 10 番と 147 番 (有名なコラールが入っている曲です)

盛

☆ ドイツ ライプツィヒ市で行われるバッハ音楽祭 2027 への参加

昨年 2024 年に訪れたライプツィヒでの音楽祭に再び出演依頼をいただきました。2 回目となるバッハの聖地での音楽祭出演です。

時と場所：2027 年 6 月 14 日 聖トーマス教会 (バッハが長年、音楽監督を務めた教会です)

曲 目：J.S. バッハ作曲 カンタータ 45 番、187 番 他

☆ レクチャーコンサートの企画

大きな演奏会の前には、小規模の演奏会を開催しています。作曲家や楽曲の解説を交えた無料の演奏会です。複数回、開催することもあります。どうぞお気軽にいらしてください。日程等が決まりましたらホームページでお知らせいたします (<https://mbkverein.info/>)。

### 一緒に歌いませんか (会員募集のお知らせ)

活

私たちは合唱とバッハを愛して活動してきました。間もなく創設 50 周年を迎える歴史ある合唱団ですが、いつもフレッシュな会員をお迎えしています。合唱の経験も年齢も不問です。まずは、お気軽に見学においでください。

練習の場所や日程は、当会のホームページをご覧ください。また、ホームページには、これまでの演奏歴も表にしてあります (<https://mbkverein.info/>)。

指導者：佐々木正利 (岩手大学名誉教授)

コンサートマスター：小原一穂 佐々木幹雄 小川暁美

練習日：毎週火曜日 18:45 ~ 20:45 日本基督教団 館坂橋教会など  
平日の夜の参加が難しい方には、日曜祝日の午後月に 1 回行っている「強化練習」もあります。

会費：一般会員は月額 4,000 円ですが、遠方の方や学生さんは格安にしています。  
入会費はいただきません。楽譜代は、別途実費。

連絡先：茂木 容子 (y.jsb.motegi@gmail.com)

[主催] 盛岡バッハ・カンタータ・フェライン

[共催] 仙台宗教音楽合唱団

[後援] 盛岡市 (公財)盛岡市文化振興事業団 岩手県合唱連盟 岩手日独協会



Bach-Kantatenverein, Morioka  
Seit 1977

Geistlichemusik Chor Sendai  
Seit 1967

